中世の光景 ▽93▲

女性スター乙前

バーバラ・ルーシュ
（米コロンビア大学教授・中世日本研究所所長）

後白河院が熱心に師事

中世の芸能者として今日でも一般によく知られているのは、能を完成させた世阿弥であろう。世阿弥はいうなれば中世の偉大な男性スターであった。それでは当時、老若男女、階層を問わず誰もが知っているような「女性スター」はいなかったのだろうか。例えば、中世の美空ひばりはいなかったのだろうか。

そのような疑問を抱いて丹念に史料を探すと、従来の歴史書では周縁に追いやられてきた、ある女性芸能者の姿が浮かび上がってくる。乙前（一〇七五？～一一六九）という名の、歌い手として素晴らしい才能を持った傀儡子である。

傀儡子とは、伝統的には文字通り人形を操る芸能者のことだが、中世では特に平安朝から鎌倉時代にかけて今様という当時流行った独特な民衆歌謡を作り、歌った女性のことを指す。そしてこの傀儡子の一種から白拍子といわれる踊り手が派生したと考えられている。

平安後期から中世にかけての日本の傀儡子や白拍子には、古代ギリシャの「ヘタイラ」と相似した点が少なくない。ヘタイラとは「女友達」の意で、高い教養・技芸を身につけ、政治家や芸術家の相手をした高級娼婦だが、例えば紀元前四世紀、当時の偉大な彫刻家プラクシテレスの愛人で、ギリシャ最高の画家とされるアペレスのモデルもつとめたムエサレッテなどはそうであった。彼女たちは乙前や亀菊（白拍子の踊り手で後鳥羽上皇の寵愛を受け、上皇配流の時には隠岐までつき従った）、あるいは五条の高橋殿（将軍義満の愛人として有名な遊女）といった日本中世の女性たちを想起させる。

●名高い今様の歌い手

さて傀儡子の一人で今様の名手だった乙前は職業的な歌い手であった。十二歳の時から今様を習い、歌い、そして教えることを生涯の仕事としたが、当然自ら創作した場合も少なくなかったに違いない。今様の名手としてあまねく都に名高かった乙前の芸の系譜をたどると、三代にわたって女性の師匠が続いている。乙前の直前の師匠は目井という女性で四三の弟子、そしてこの四三を教えたのもやはり女性の靡であった。

保元二年（一一五七）に後白河院は乙前を宮中に呼び、弟子となって彼女のレパートリー、すなわち持ち歌を習おうとした。院は当時まだ天皇在位中で三十代に入ったばかりだったが、乙前は既に七十代、現役を引退して五条の尼と呼ばれていた。

後白河院は幼時からことのほか音楽を愛し、様々な声楽、器楽を修めたが、何にもまして熱愛したのは今様である。元来民衆の歌謡だったこの様式も、院のころには既にほとんど古典として形式の完成を見ていた。初めて院の今様の師になるよう求められた時、乙前は辞退した。年を取りすぎていたし、こともあろうに院を弟子にするなど畏れ多いと考えたのである。しかし院はあきらめず、ついに乙前の弟子になって真剣に修行を続けた。

●「梁塵秘抄」に集大成

後白河院は今様を集めて有名な『梁塵秘抄』を編纂したが、実はそれは乙前の持ち歌であったことは余り知られていない。乙前がいなければ、その作品を集成し筆記した『梁塵秘抄』も生まれることはなかったというのが真相である。

後白河院がいかに乙前を敬愛していたかは、次のような感動的なエピソードからわかる。八十代になった乙前が重い病にかかったとき、院はその枕辺で薬師如来を謳った今様（おそらく『梁塵秘抄』所収の三十二番であろう）を歌った。重病を癒す祈願として効験があると信じられていた歌である。心打たれた乙前は、弟子である院の厚意に涙を流したという。

歴史家というものは、実際に生きられた生を一つの物語に変えてしまう。人間の経験からいくつかの断片を選び取り、それらに焦点を当て、再構成し、一つの物語に仕上げるのである。この作業は文学者のそれに似ていなくもない。もちろん、歴史家の意図はフィクションをつくることでないが、時にはそうして作り上げられた物語がある種の歪曲を免れることができないようになってしまう可能性がある。

●歴史家の選択で埋没

これまで『梁塵秘抄』研究については、もっぱら編者である後白河院に焦点が当てられてきたのも、いくつかの断片が選択された結果であった。結局のところ、そうした作業によって、天皇（院）が編纂したからには、研究に値する作品にちがいないという、歴史家の言い分を正当化させることになってしまったのである。と同時に、乙前は自動的に脚注のなかで申し訳程度に言及される存在へと変容させられ、最終的には忘れられてしまう。中世の美空ひばりは、こうして歴史のなかに埋没してしまった。

◇毎週土曜日に掲載します。

文芸を担った白拍子
（イラスト・安芸　早穂子）

〈メモ〉

歌う女性集団　平安末、大江匡房（まさふさ）は傀儡子について「鼓（つづみ）を持ち、踊り、歌い、幸運を招く祈りを唱え、神々を拝む女性」と書いている。その起源・性格については不明な点が多いが、鎌倉時代に相当の社会的評価と影響力を得ていたことは確かである。例えば、彼女らの一団が高位の武士を相手に鎌倉で訴訟を起こし、勝訴したという事実が伝えられている。

『梁塵秘抄』32番　「像法転じては、薬師の誓いぞ頼もしき、ひとたび御名を聞く人は、万（よろず）の病を無しとぞいふ」